

明治時代の力

國學院大學教授 河野省三

明治時代の初期は歐米の文明開化に心酔した時である。又、全體に亘つて云へば外交難に當面して苦心した時である。しかし一面から觀れば、最も活氣に富んだ時代であり、國運の向上した時代であつた。考へて見ると、あれ程迄に世を擧つて歐化した思想界の荒浪を、よくも斬抜け得て、幸に暗礁にも乗上げず、光輝ある明治時代を現出し得たものであると驚かれるが、そこで問題となるのは、斯かる暗潮を巧に乗抜けて明治時代の堅實なる文化を鍛へ上げ、國運を發展させた其の中心の活力は抑も何であつたかと云ふことである。

よく世間では、明治初年を以て歐米文明の心酔時代であると云ふが、其の歐米文明の心酔はどういふ姿に於て現れてゐたかについて、何人か仔細に之を睥視し檢覈して見た者があるだらうか、私はそれが

餘りに漫然たる一瞥に止まりはしないかを疑ふものである。

明治初年を回想すると、其の當時の流行唄に、「散切頭をたゝいて見れば文明開化の音がする」といふのと、其の反對に又「丁髷頭をたゝいて見れば天保時代の音がする」といふのとがあつたことが、先づ念頭に浮んで来る。又、明治八九年頃には「文化」といふ二冊の本が出て、第一巻の初頭に、散切頭を論じた種々の著述があり、明治七年には加藤弘之氏が、「國體新論」といふ頗る猛烈な論議を公にしてゐる。試みに其の一節を讀んで見ると、「君子も人なり人民も人なり、決して異類の物に非ず、然るに天地霄壤の段階を設くるは何事ぞや、斯かる野卑なる國に生れたる人こそ實に不幸なれ」と云つたやうな、實に、思ひも寄らぬ意味の事が書かれてゐる。之を見ても當時の所謂の新學を唱へた人が、如何に歐米文化の前に眼がくらんでゐたかを察せられるのであるが、明治九年に中島勝義が書いた或る書物に至つては一層又烈しいものである。例へば「所謂る普天の下王臣に非ざるはなし云々、牧民などと失敬千萬なる云々、牛羊同様に思ひ」といふ風で、少しばかり拾ひ讀したゞけでも、其の危激の文句に驚かされる。

其の外又最も興味のあるのは、明治六年に出た山本與助の「世界秘事往來」で、これは明治初年の日

本の縮圖と云つても可いものである。A B C のアルファベットから、ポリス、メイドなどの流行英語を初め、種々の事が書いてあつて、當時に於て最も必要な書物かと思ふが、此の書物の初めに、京都に於て中學校に在りし女子數人、御通輦の折柄、洋語を以て御安着を祝し奉りしといふ話を記して、文明開化の目出度さを謳歌してゐる。そして其の上欄には、京都に婦女職工引立會社が出来たと書いてゐる。これは女子授産場、職業紹介所の始を成したものとらしく、會社の歴史の上から云つても、非常に面白いことであると思ふ。

次に又當時の歐化主義的思想を最もよく證明するものは、明治十七年に出た高橋義賢の「日本人種改良論」である。特に内容の紹介はせぬが、こゝまで來れば西洋かぶれも極端であつて、或る一部の人々が我國を忘れる程まで如何に新奇の文化を歓迎したかを、これに依つて十分知ることが出来るのである。

斯かる極端な歐米心醉思想に對する反動として國粹保存其の他の保守論が起つたのは明治二十年以來であるが、私は是等反動思想の力のみを以てして狂瀾を遮り止め得たものとは考へない、根本の力は寧ろ他に存するのであつて、明治時代の堅實な文化を鍛へ上げた最も深く廣く且つ大なる力は、開化思想に逆行する方面よりも、却つて常に開化思想と相伴ひつゝ發達した國民精神から生れたものであると信

ずる。

明治二十年頃までに出た書物を見ると、表面的には随分歐洲文化に心酔したやうな事柄が記されてゐるが、其の深い奥底には何れも國民的自覺の力の勃然として起つてゐるのを見ることが出来る。どうかして我が日本を向上させねばならぬといふ考が横溢してゐる。潑刺たる發展的の理想が躍動してゐる。國家の力と自分の力とを結びつけて眞に力の充實した日本國家を建設せねばならぬといふ熱烈なる意識の燃焼がある。私は此の精神が多く常に開化思想に伴うて現れてゐることを指摘したが、保守的的反動思想の所有者も、決して退嬰一點張であつたわけではなかつた。即ち此の精神は保守進歩兩方面の思想を超越した國家的國民的信念であつて、語を換へて言へば、兩者の思想に一貫して流れてゐた力である。そして其の中心力として、此の力に最も大なる作用を與へたものはと云へば、それは論ずる迄もなく明治聖帝の大稜威であつた。

二

私は以上に於て、明治文化を生んだ根本の力、時代の大勢を支配した底力が何であるかを検討して論定する所あつたが、次には其の底力の實例を聊か述べて見たい。

明治四年には元田直氏の「東京土産」といふ書物が出てゐるが、これは御誓文を骨子として世界の

勢を説き、生活の改善を提唱して、時代に適した新政策の樹立を論じたもので、其の立論の根礎とする所は、皇學のみならず西洋學をも採入れて、日本を最も強く發展させるものゝ上に新政策を樹立せねばならぬとある。

又、明治五年に石川縣で出した五ヶ條の御誓文の和解の中に面白い一節がある。それは「知識を世界に求め」の條に對して解釋を施した部分であるが、之を釋して、「此の御趣意は身柄家柄に拘らず、萬人にすぐれたる善知識を世界の中より尋出し、萬國に偉名を輝かすやうにすべ」きであるとしてゐる。土地が石川縣だけに、知識を善知識の意味に取つたのは滑稽であるが、これも氣宇の大きく且つ活々としてゐたことを示す一證である。

翌六年に出た、山本與助の「世界婦女往來」は世界地理を説いた書であるが、其の前後に於て我が國體の尊貴を論じ、世界に於ける日本としての日本婦人の覺悟を促してゐる。乃ち其の抑もの説出しから、「文明開化の治世に當つては婦人女子と雖も世界萬國の状態を知らねばならぬ」といふ意味を記し、又、津田梅子の事について當時先方から來た手紙を掲げて、日本人は活躍の素質を有することを證示して、大に日本婦人の發奮を喚起してゐるのである。

又、前述の中島勝義といふのは所謂自由の權利を振廻し過ぎて保安條例に觸れた人であるが、其の著

述の中に述べてる所は、何れも眞の愛國者たる資格を高調した議論である。此の人は人民の權利自由を尊重せぬものは愛國者でない」と論じてゐるのであるが、その眞底には、如何にして我が日本國家を新時代に適した眞の健全な國家たらしめんかに苦慮する愛國心が動いてゐる。眞の孝行とは全く權利義務を重んじ、一面には親の人格を尊重するにあると論じてゐるが如きも、確に其の時代としての先覺的意見である。

それから、これも前に擧げた「日本人種改良論」は、世間で最も多く歐洲文化心酔論の代表的な適例として擧げる所のものであるが、此の極端な人種改善論も他の一面から觀れば確に國民體育論である。其の見方は假令誤つてゐるとしても、其の根柢には、斯くして日本國家の力を作りたいといふ精神が動いてゐるのを認める。福澤諭吉氏が此の書の初に、序文を書いてゐるが、それは、「國權擴張は迂老が畢世の目的である。願はくは國民の養生を重んじて、武勇の基礎を固めたいものである」といふ趣意のもので、福澤氏の議論としては珍しいもの、一つである。

福澤氏は又、明治十五年に帝室論を書き、二十一年には「尊皇心」を論じてゐるが、これも翁としては珍しい國粹保存論である。世間には餘りに翁の此の方面を説かないが、少くとも此の二論は一種の國粹保存論であつて、反動思想から出たそれよりも一步を先じてゐる。此の意味に於て翁は國粹保存論

の先驅者であり、陳勝吳廣であると云ひ得られるのである。

加藤弘之氏の議論も随分激しいものであつたが、後に天賦人權説に基く幸福論を抛ち、明治十五年頃には全く迷夢から覺めて我國體を重んぜねばならぬと云ふ意味の人權新説を著してゐる。即ち國體新論とは全く反對のものである。表題から見ると人權新説といつた方が寧ろ危激性に富んでゐるやうであるが、其の實全く前の天賦人權説とは離れて我に歸つた議論である。氏は是より先に「愛國心の説」といふのを書いてゐるが、これは明治十年乃至十一年頃のものらしく、「我々國民に必要なのは自分の國の文化に親しむ事である。そして本當に之を味ひ、よく其の風習に慣れることが、眞の愛國心を築き上げる基である」と論じてゐるのは、確に面白いと思ふ。

加藤氏の此の議論も、福澤諭吉翁の帝室論尊王論と同じく、世人が餘り説かないが、これ亦新國粹保存論の先驅を爲すもので、單なる國家的精神から國民的文化の自覺に入つたものと見てよい。

其の外にも國民精神の現れは種々の方向に見られる、其の一種として明治十一年頃から二十二年頃にかけて出た様々の百首物も亦注意すべきものであらう。例へば明治十二年頃に「明治英名百首」といふ書物が出てゐるが、其の中には楠公の討死は三助の犬死と同じだといふ歌がある外、國民的精神を歌つた男女の吟詠を色々集めた面白いものである。それに似たものに又、「明治英名百人首」がある。内

容は殆ど同じであるが、人に於て面白い顔觸れを集めてゐる。それから、「愛國民権演説家百傑選」といふやうなものも明治十年に出てゐる。明治二十三年に出た第一回の「國會議員百首」なども非常に面白いもので、それを見ると、如何に明治二十三年頃の先輩が熱烈な愛國心に燃えてゐたかを知ることが出來て、坐ろに今昔の感に堪へないものがある。

明治十五年に出た東洋民権百家傳、一名日本義人傳と、それに續いて出た東洋義人百家傳とは、性質に於て同じやうなもので、これも所謂百首物の中に算へて然るべきであらう。

我々の先輩は新思想を把持する者も、舊思想を保維せんとする者も、共に國家的精神に燃えてゐたことは一つであるが、其中でも殊に新文明の建設に寄與した人々が、如何なる點に於て國力を強めんとしたかといふと、主として權利思想を本として國民の愛國心を養成せんとした。此の事は明治十三年に公刊された「愛國論編」を見てもよく分るが、「演説家百傑選」が愛國民権と列べて書いてゐるのも亦其の一證である。

三

斯ういふ風に一々事實を述べ立てゝゐると際限がないが、要するに明治時代の文化を作り出し、大勢を動かした根本の力を、本當に我々が握まなければ、明治文化史も、西洋心酔の世相も其の眞髓を得る

ことは困難であると思ふ。

それにつけて思出すのは、明治神宮の御鎮座後寶物殿を拜觀して種々の御調度品を拜見した中に、二尺ばかりの銅製の置物で一人の兵士が兵役義務を終つて郷里に歸らうとする時の姿を現したものと、之に比べて五寸ばかり低い二宮金次郎苦學力行の姿を現したものと、この二つは、殊に私の目を惹いたことである。明治天皇は此二つの置物を展覽會の數ある美術品の中から御選出になり、お買上になつて日々表御座所に飾らせ給ひ、一つには御大心を慰さめらるゝと共に、國民の上を思はせられたのであつて、我々は之を拜して大御心の忝さに感泣し、此の難有い大御心こそは、やがて明治時代を造り上げた偉大にして深く且強い力の中心的原動力であることを痛感した次第であつた。明治時代の文化も、千古未曾有の國運の發展も、其の淵源する所は皆此の大御心一つに歸するのである。

今や我々は此の光輝ある明治文化の後を受けて昭和文化を築き上げんとする時に當つてゐるが、眞に堅實な文化の基礎を築くには、確乎たる國民的信念に加ふるに、責任を尊重する精神、勤勞を尊重する思想を以てせねばならぬ。此の三つが合はせ働いて、初めて最も力強い昭和日本の國情が成立つのである。私共は明治時代を一貫した底力を回想するにつけても、多難の今日に直面して、一層の重責を感じるものである。(溝口生筆記)

會員急告！！

正會員及特別會員の御方て本年及それ以前の年度の會費未納の向は至急本會の振替^③にて御納入願上候正會員は年額金二圓（郵便局手数料金二錢）特別會員は年額金三圓（郵便局手数料金二錢）本會の振替用紙と共に便宜の郵便局へ御振込願上候若し振替にて御送金無之時は其中集金郵便に托す可く其節は改正集金郵便令に據り正會員の會費二圓の集金不取扱規則に付き二ヶ年分の會費金四圓頂戴可致豫め御含置被下度尙又此の外集金手数料十錢加算可致候間前以て申上置候本會は可成早く振替にて御送金の程双方の便利と存じ右希望に不堪候以上

昭和三年八月